

# 吉野山の植物

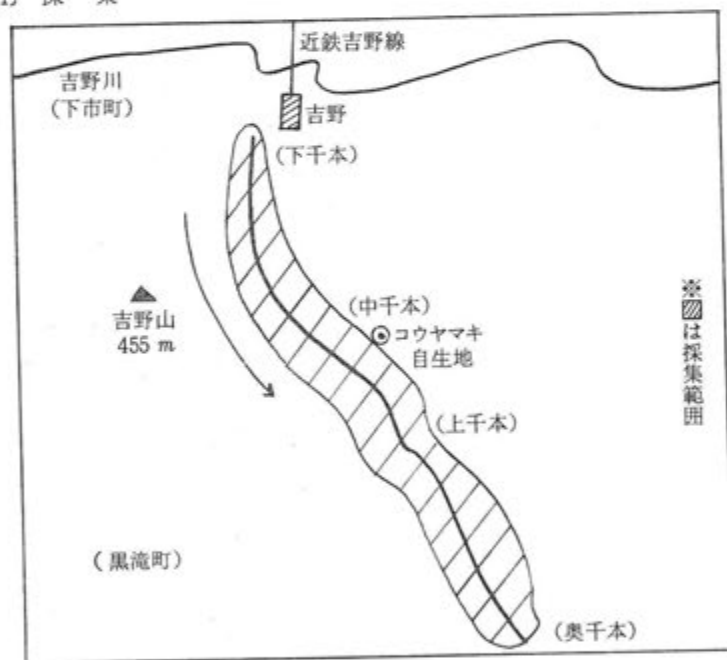
30期生

## I テーマ設定の理由

日ごろ僕たちは、ハイキングや登山をしても「自然」というものを詳しく見ず、ただ漠然と周囲の景色に見とれてしまっていることが多いと思う。でも、きれいな花をつけるものは、特徴などをよく知っているの、いつもは、つい見落としているような道端の雑草について調べた。また、自分ながらの考えで、植物を観察し、親しんでいこうと思ったことも、その一つである。

## II 研究方法

### (1) 採集



### (1) 方法

山へ行って採集する時には必ず大きなビニールのふくろを用意しておく。根を残すとよいものつまりシダなどは、少し深い目にとる。しおれないうちに家へ持ち帰り、葉を広げたりして適当な形に整えておく。一応それを新聞紙に、はさんでおいた。

### (2) 順序

吉野山の登山コースは、上図のように、上に行くに従って、下・中・上の千本(桜の木の数からこの名がつけられた)となっていて、採集もその区域順にやるとわかりやすい。

### (2) 手入れ

採集してきたものをよりよいものにするには十分に手入れをしてやるのが、大切である。新聞紙(200~300)を用意し、天気のよい日には、それを広げて日光に当て

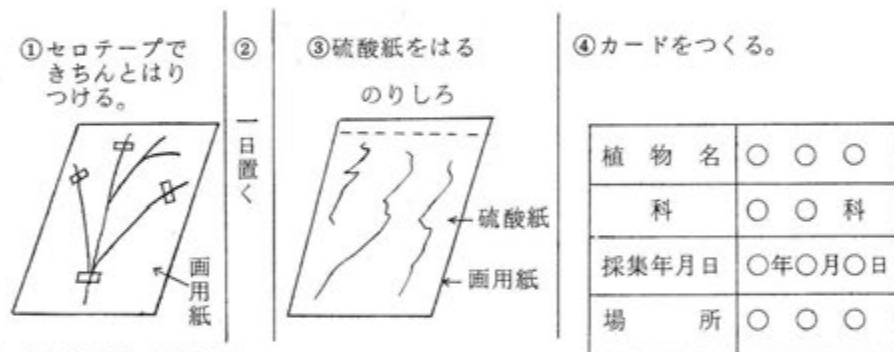
ておく。その紙の吸しゅうした熱が、さめないうちに植物をはさみ、紙に水分を吸わせる。家の中へもって帰ってこれをすると、すぐさめてしまうので少しぐらいの暑さはまんしてやった。これを1日3回、1週間もつづけると、植物の水分は、ほとんどなくなる。この作業はとて根気のいることで、これをあいまにしてしまうとあとはどうにもならないので、一生懸命やった。これが成功した原因だと思う。

### (3) 標本の作成

せっかくこんなところまでやったのだから標本をつくらない手はない。

これは、ある人からおそわった方法で「保存がきく」ということが、第1利点である。この人がつくられた標本の中で昭和6年というのがある。しかしこれは、くさりもしていないし、変色もしていない。そこで僕もこの方法でやることにした。

まず画用紙と硫酸紙を買ってくる。そして、よく乾いた植物のしわをうまくのばし、それを小さく切ったセロテープで画用紙にはる。こうしたものを1日くらい置いておき、翌日硫酸紙を画用紙のうらののりしろに貼りつけ、表が植物にかぶさるような形になるようにする。最後は、別紙にその植物の名前・科・採集年月日・場所を書き入れるとできあがる。硫酸紙は、標本になってからの水分をすいとらせたり、植物自身が、いたまないようにするためにつける。(下図参照)



### (4) 特に注意して見た所

- 中千本あたりにはシダの大群落があるので、その状態を見る。
- 中千本と上千本の間に、天然記念物となっている「コウヤマキ」の群落があるので、よく見る。

## III 研究結果

### (1) 下千本付近の植物

ここには、ふつう一般に見なれている植物が多い。少し紹介すると、キツネノボタン・ヤブハギ・ヒガンカツラ・アオミズ・ヌスビトハギ・ダイコンソウ・ミズヒキノウ・ヒメジョーン・クズなどの雑草をはじめ、そのつど紹介しては、きりのないくらい多くの植物がある。

このめずらしい植物といえば、マツムシソウという頭状花で、これは、主に日当たりのよいところにはえるということがわかった。

ツクサのおしべは、何本あるかということはずぐわかる。当然6本である。しかしこの中で、花粉をつけるおしべは、2本しかないということも、はじめて知った。

(2) 中千本付近の植物

ここには、うっそうとした谷間一面にじゅうたんをしきつめたように広がったシダの群落がある。リョウメンシダが主に分布していて、どちらが表かうらか一目でわかりにくいシダである。また、この付近では見ることでできないシシガシラ・イヌワラビ・ヤノネシダなどの羊歯植物（ようししょくぶつ）がある。

シダの間をぬって咲いている花は、小さいホタルブクロ・ヤブミョウガである。何回となく見てわかったことだが、ヤブミョウガというのは、1つ1つポツンと咲くのではなく5~10本くらい集まって咲くということがわかった。

(3) 上千本から奥千本にかけての植物

上千本より上に行くと、低木といってもよいような植物が多くなり、そう目立つ雑草は少なくなった。よく目につく木は、葉に黄色い紋のあるキモンヒヨドリバナ・桜の名所吉野山の山桜である。

(4) コウヤマキ群落について

中千本と上千本の間には、天然記念物となっている「コウヤマキ」の群落がある。ここには、立て札があった。

天然記念物「コウヤマキ群落」

「コウヤマキは、わが国特産のスギ科の常緑高木であって現在本州、四国、中部、九州の一部に野生しているがその数は少なくなっている。この植物は、地質時代（地球表面に地殻ができたころ）の第3紀には、広く北半球に分布していたが、日本の紀和を除いて他は全滅し、いわゆる生きた化石植物である」と書いてあり、非常に貴重なものであるということがわかった。コウヤマキの葉は、他のスギ科の植物とはちがった特色をもっている。この葉は、もと2枚の葉が側面で合生したものである。その証拠に葉の横断面をみると2個の維管束（ふつうは1つしかない）がある。

#### IV 結 論

このテーマは、どんな道順、実験を経てその結果こうなったということはないので、一応区域別の植物分類をしようと思う。

- (1) 下千本 雑草が主、よく知られている植物が大部分である。
- (2) 中千本 シダの群落が見事である。ここにはコウヤマキの群落がある。
- (3) 上~奥千本 変わった草はない。木と呼ばれるものが大部分を占めている。

#### V 総 括

- (1) 感想→標本をつくるのに苦労した。でもそれが実って自分でも満足できるものになったことがうれしい。また今までわからなかった植物を調べてみるといろいろな、おもしろい特ちょうがあったりして「あ、こんなことが」と思うものもあり、今回の研究だけで得ることができたものでもたいへん多かったと思う。
- (2) 反省→第1の反省としてテーマが、漠然としすぎてどこから手をつけてよいかわからなくて手間取ってしまったこと。第2に「植物採集」という言葉だけにこだわってしまい、その区域ごとのまとめがあいまいになってしまったことがいけなかったと思う。